〈調査報告〉

北海道アイヌ協会浦河支部創立当時のこと：富菜愛吉

北海道立アイヌ民族文化研究センター
研 究 紀 要
第 9 号
2003年 3 月25日発行

小川　正人

〈調査報告〉

北海道アイヌ協会浦河支部創立当時のこと：富菜愛吉

小　川　正　人

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　富菜愛吉「北海道アイヌ協会浦河支部のことなど」
　1　青年時代のこと
　2　北海道アイヌ協会創立のころ
　3　浦河支部の創立と活動
Ⅲ　註記
　参考資料

Ⅰ　はじめに

1　ここに報告するのは、浦河町杵臼（きねうす）在住の富菜愛吉さん（1916年生まれ）に語っていただいた、社団法人北海道アイヌ協会（現社団法人北海道ウタリ協会）の浦河支部創設の頃の体験記をまとめたものである。本稿は、近現代アイヌ史研究の一環として、戦後間もない1946（昭和21）年に結成された北海道アイヌ協会の活動について、特に地域の活動に着目した記録の報告である。同時に、ひとりひとりの歩みの記録の集積を通じて近現代史を考え認識する手がかりを蓄積していきたいという報告者の考えにもとづく2回目の報告[(1)]でもある。

富菜さんは杵臼の地に生まれ育ち、杵臼尋常小学校を卒業後、西舎（にしちゃ）の高等小学校に進んだ。当時、この地でのアイヌの家庭からの高等小学校進学は稀なことであり[(2)]、富菜さんによれば、そこには父親の強い意志がはたらいていたということである。高等学校卒業後は青年団でも旗手をつとめるなど熱心に活動し、徴兵検査を受け歩兵第25連隊に入隊、兵役をつとめた後は在郷軍人会の活動などにも従事した。青年団、軍隊、在郷軍人会のそれぞれの活動において表彰歴を有している。

(1)　1回目は、小川「私の歩み：黒川セツ」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号、北海道立アイヌ民族文化研究センター、2001年3月、として報告した。
(2)　富菜さんの尋常小学校卒業時期（1920年代後半）のアイヌ児童の高等小学校進学率については、明確な統計的数値を得ることはできず、また地域による差異も考慮しなければならないが、報告者はかつて、幾つかの事例から推測する限りでは、高く見ても10%程度ではないかと述べたことがある（小川「「北海道旧土人奨学資金給与規程」（1931年）について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第6号、2000年3月）。

敗戦後のアイヌ協会結成の動きの中で、浦河支部発足の準備段階から参画、静内で開催された協会の創立大会にも出席し、支部の会計書記という仕事をつとめたということである[3]。

ここでは本文に先立ち、前提的なことがらを説明しておく。

２　近現代のアイヌ史に関する記述の中で、戦後のアイヌの活動に言及したものは、記述量の多寡を問わないならば相当な数にのぼる。しかしながら、その多くは、戦後間もなくの数年間に北海道アイヌ協会の結成など活発な活動が展開したことを、いわゆる戦後改革期の社会気運と重ねながら概説的に指摘するのみである。やや具体的な記述に踏み込んだとしても、『アイヌ新聞』や北海道アイヌ協会の中心人物らの言論や活動に着目するものであり、地域の支部活動に関する記録は乏しい[4]。

このような中で、アイヌ協会浦河支部については、支部の40年記念誌が刊行されているが、創立期の活動に触れた部分は２ページ程度である[5]。浦河町の関係する郷土史類でも、わずかに『拓土幌別』という冊子が支部の歴史に２ページほどを割いているのみであり、ここでも創設期の活動への言及は見られない[6]。いっぽう、富菜さんに関するものも、これまで公刊されたものでは従軍体

---

(3)　北海道アイヌ協会の活動は、本稿に掲載した富菜さんの談話にもあるとおり、発足から５、６年後には表立った動きが見えなくなる。その後1960年に再建総会を開催し、名称を北海道ウタリ協会と改称、その頃から支部の再建も進み、以後1970年代にかけて支部・会員数の増加をみている。富菜さんは1970年代以降も、副支部長や支部の地区役員等を歴任しており、長年にわたって支部活動の担い手として重要な位置にあったと推察する（支部役員等の経歴については、『40年のあゆみ』北海道ウタリ協会浦河支部、1986年による）。

(4)　そのような中では、竹ヶ原幸朗「解題〔『北の光』〕」（『アイヌ史　北海道アイヌ協会北海道ウタリ協会活動史編』北海道ウタリ協会、1994年）などが、限られた資料を駆使しながら協会創立前後の基礎的事実の確定を試みており重要である。当事者・関係者の回想としては、『エカシとフチ』（同編集委員会編、札幌テレビ放送、1983年）に、小川佐助、松田ノブ子（浦河太郎吉の娘）からの聞き取りが掲載されている。
近年わずかずつではあるが基礎的資料の整備も進みつつあり、『アイヌ史　資料編３』（北海道ウタリ協会、1990年）は、「協会史資料」として戦後間もない時期のアイヌ協会関係の文書類を収録しており、解題を欠くきらいはあるものの、「北海道旧土人保護法」による給与地に対する農地改革の適用を巡る運動などについて有益な資料群となっている。同じく『アイヌ史　北海道アイヌ協会北海道ウタリ協会活動史編』（北海道ウタリ協会、1994年）は北海道アイヌ協会『北の光』を復刻掲載している。また『アイヌ新聞』についても、現在のところ資料集では小川・山田伸一編『アイヌ民族　近代の記録』（草風館、1998年）において1998年時点で国内で確認できた分の総目次と主要記事を見ることができるのみであるが、その後アメリカ・メリーランド州立大学所蔵になるブランゲ文庫資料の日本国内での公開が進んでおり、同文庫に『アイヌ新聞』の刊行が確認されている号のほぼ全てが含まれているので、これらの閲覧が可能になる日も近いと予測する。
　本稿の主題に照らせば、これらの資料の記述から、地域の動向を伝える記事等を丹念に拾っていく作業が今後の課題となると考えるものである。

(5)　北海道ウタリ協会浦河支部『40年のあゆみ』（同、1986年）。それでも、同書は後述するような活動の概要を紹介している点で重要である。
　この他では、北海道ウタリ協会編『50年のあゆみ』（北海道ウタリ協会、1996年）にも、関係記述は掲載されていない。

(6)　幌別開村百年記念祝賀協賛会編『幌別開村記念誌　拓土幌別』（同会、1971年）。同書は「浦河ウタリー協会」という項を掲載しているが、ここでは結成を「昭和四十一年」としており、敗戦直後のアイヌ協会への言及はない。この結成年の記述はむしろ、富菜さんの話にも出てくるアイヌ協会支部の活動中断を経た、再結成の時期や経緯の側面を示唆する資料としてとらえるべきだろう。このほか管見の限りでは、『浦河町史』等にはアイヌ協会支部に関する記述は見られない。

験を中心とした聞き取りがあるのみである[7]。

このような先行研究の状況に照らせば、本稿が報告する富菜さんの体験記録は、アイヌ協会支部の創立前後の活動を伝えてくれる点で貴重である。富菜さんが、理事、支部長といった言わばトップの位置ではなく、「会計書記」という実務的かつ活動の基軸を担う位置にいた人であることの意味も大きいだろう。

具体的な内容に即してみても、支部で住宅の改築を目的に材木を調達した活動[8]は、これに先立つ1937（昭和12）年「北海道旧土人保護法」改正が、同法による新たな「保護」事業の眼目に「不良住宅改良」をうたっていたことや、「北海道アイヌ協会」の1947年度活動方針とされる文書[9]の中でも住宅の「改良」がうたわれていることなどとの関係で、着目に値すると考える。

なお、支部活動等に見られる富菜さんの几帳面さと行動力は青年時代の活動から連続する面もあると考え、録音時間としては僅かではあるが、戦前の青年団や在郷軍人会での思い出についても併せて掲載した。

本文のほか参考資料として、本稿と同時代のアイヌ協会の活動に関係する事項をまとめた年表と、浦河および近隣（荻伏村）の支部活動の状況を伝える文献資料（新聞記事）若干を末尾に掲載した。

3　富菜さんが生まれ育った杵臼は、浦河町の東部、日高幌別川の河口からやや遡った東岸に位置する。対岸（西岸）の西舎とともに、川沿いに比較的開けた平野が広がり、現在は田畑と牧場が多く見られる地域であり、記録には古くからコタンが存在したことが報告されている（地図参照）[10]。富菜さんの談話にも登場する、アイヌ協会創立時の常務理事であり、のちアイヌ無形文化伝承保存会の設立にも中心的役割を果たした小川佐助は西舎の出身である。

いっぽうで、こうした平野部には早くから移民が入り、特に西舎には政府が1907（明治40）年に内閣馬政局の日高種馬牧場（のち陸軍省をへて農商務省管轄）を設置したこともあって、幌別から西舎にかけては市街地の形成も進行する。これと時期を併せるようにして、この地域のアイヌの人口はやや減少をみている。減少した人口のゆくえについては今の報告者には把握できてはいないが、おそらくは他への転住が相次いだものと推測する（表参照）。

---

(7)　堀内光一『軋めく人々・アイヌ』新泉社、1993年（ただし同書では名前を伏せて掲載されている。富菜さんから「これ、俺なんだよ」との教示をいただいたにすぎないものなので利用にあたっては注意されたい）。
　これ以外では、管見の範囲では杵臼小学校の開校80周年記念誌『杵臼』（杵臼開基百年開校八十周年記念協賛会、1970年）に小学校時代を中心とした短い回想文がある。

(8)　このことについては前掲『40年のあゆみ』12ページにも僅かながら記述があり参考になる。

(9)　「社団法人北海道アイヌ協会1947年度事業計画書」前掲『アイヌ史　資料編３』。原資料の表題は「昭和二十一年度事業計画書」となっているが、内容から1947年度の計画書であると判断できるものである。

(10)　以下、特に断わる場合を除き、杵臼地域の沿革等については『浦河町史』、『北海道地名大百科』によった。

［杵臼および周辺のアイヌ人口の推移］

年代	杵臼村	西舎村	幌別村	出　典
1899頃	30戸 125人	34戸 136人	15戸　64人	『北海道殖民状況報文日高国』
1934年頃	18戸　58人	16戸　70人	（東幌別村） ７戸35人	『北海道旧土人保護沿革史』
1962年	19戸　82人	７戸　16人	（西幌別） 11戸」　64人 （東幌別） ８戸　28人	『日高地方におけるアイヌ系住民の生活実態とその問題点』より「アイヌ系住民」世帯数

４　本稿のもとになった採録は、次の２回にわたって行ったものである。

・1995年１月17日：アイヌ協会浦河支部創立当時の活動について

・1996年２月29日：前回の補足調査

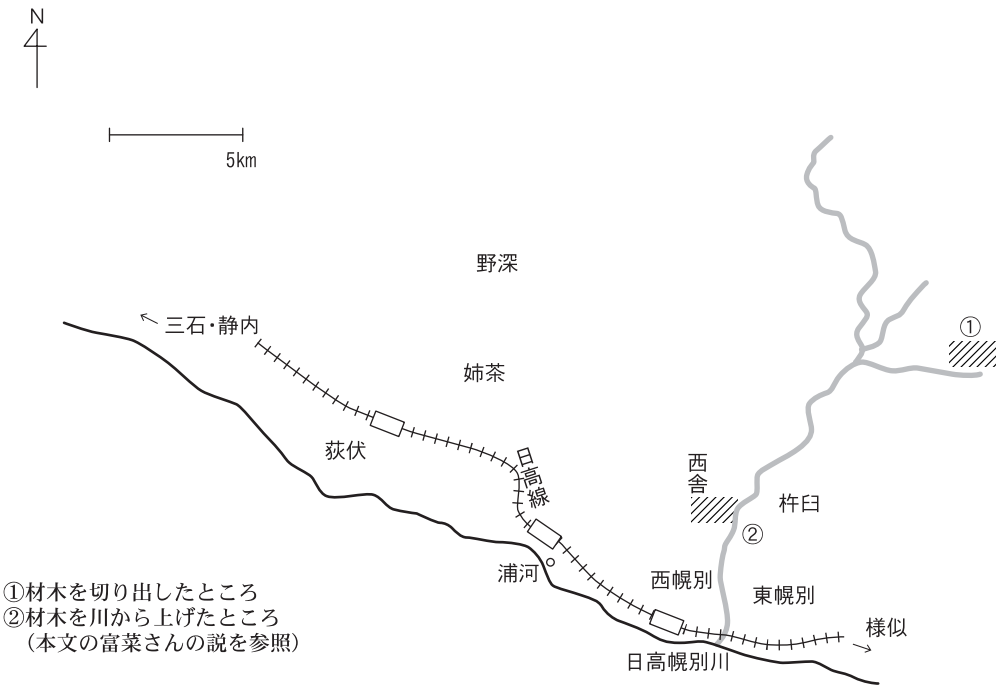
２回の録音時間の合計は約３時間である。録音テープはいずれも北海道立アイヌ民族文化研究センターにおいて保管している[11]。１回目は阪神淡路大震災の当日であった。録音の前後に、テレビから刻々と伝わる被害の様相を話題にし、それぞれが被災地を気にしながらの採録であった記憶は忘れ難い。

富菜さんからの採録は、富菜さんの活動と人となりとを知る大谷洋一氏からの紹介によるものであり、１回目の採録は大谷・小川の両名で行っている。また大谷氏からは本稿の校正段階においてテープの聞きおこしの部分について懇切な指摘を受けた。このような機会につながる縁をとりもっていただいたことと併せ、氏に感謝したい。

そして富菜さんには、50年ほども昔のことをあれこれと聞き続けたにもかかわらず、いつもハキハキと応えていただいたことへの感謝と、追って更なる補足調査をする予定でありながら、報告者の準備不足により果たせずにいることへの謝意とを申し述べたい。

採録時の富菜さんの語りは、いつも力強く、自分の信念を語り、それを通して後の世代（聞取りをしている筆者たちも当然ながら含まれる）の精神態度を問い、その問いの中に次代への受け継ぎを求めるものがあったと思う。このように文字化したものを通じてでは、この口調を伝えることは難しいとは承知しつつも、そういう語りであることを付記しておきたい。

⑾　原資料番号 CC000300、CC000315。公開用資料は別途複製編集により作成する予定であるが番号は未定である。



〔出典〕内務省地理調査所５万図（1946年発行）「浦河」「西舎」をもとに作成。

Ⅱ　富菜愛吉「北海道アイヌ協会浦河支部のことなど」

［凡例］
- ２回の聞き取りを、主に目次に掲げたテーマにそって並べ替えた。
- 富菜さんの語りの部分は、録音をそのまま文字化したものをもとにし、富菜さんの語り口調をなるべく残すようにした。ただし、紙幅の都合等により同じ話題の重複部分の割愛や、話し言葉にありがちな間投詞の削除などの文章の圧縮・整理を施している。小川らによる質問の部分については、基本的には富菜さんの語りと同様に文字化したが、単なる質問や相づちについては、省略したり要点のみを記すにとどめた場合がある。このような措置についての逐一の断わり書きは行っていないが、比較的まとまった分量の割愛を行った場合は中略の旨を注記した。
- 一つの目次の中では、話題ごとに小見出しを付けた。
- 小川による補足等は〔　〕内に記した。語意の説明などの簡単な註記は適宜本文中にカッコ書きで記し、やや長い註記は本文中に番号を付けⅢに記載した。
- 聞き取りが困難だった箇所は「？」で表した。
- 典拠となった録音は、それぞれの区切りごとに末尾に（　）内に６桁の数字で示した。例えば（950117）は1995年１月17日の採録を示す。

１　青年時代のこと

青年団の活動のこと

（小川）〔前略〕青年団で札幌へ出たの〔1936年の陸軍大演習の際に札幌での「親閲」に参加したことを指す〕[1]って、富菜さん数えで十…

（富菜）19歳

（小川）19のときにその、青年団のやつで札幌まで行って。

そのときは、ここの青年団からは富菜さんぐらいなんですか？何人か…

（富菜）いやいやいや、みんな、みんな…

（小川）青年団はみんな…

（富菜）青年は全部行ってる。

（小川）全部行って、で、富菜さんが要するに一番先頭…

（富菜）旗手な。

（小川）旗手で。〔旗は〕重いんですか？

（富菜）どれぐらいあるもんだか。何も感じなかったな。そら真剣だから。

〔中略〕

（富菜）札幌へ行けば、〔自分たちはみんな〕田舎もんだからね、田舎のもん連れて歩くったらゆるくないもんで、まあ、あっちさ連れてけば見えなくなって迷ってどこだかいなくなる、お前ら動くな、ってここ置いといて俺が探しに歩く、て苦労したもんだ。

（小川）要するに富菜さんがいちばんわりと年長なほうなんですか？
（富菜）したから一番先頭で、先輩だもの。教官の、代理する役、仕事してたもんだ。
〔中略〕
（小川）青年学校って、あれは、だいたい毎日通うもんですか？
（富菜）いや、週に何回だな。
（小川）何回か通って。行ったら授業受けるとかっていう…
（富菜）受けるの。
学科試験から、全部。全部、一切のこと、やらされるよ。
（小川）でその他に訓練みたいな…
（富菜）訓練、それが専門だもの。
コタコタなるまでやられる。
(960229)

兵役と在郷軍人会での活動のこと

（富菜）〔兵役から帰ってきてから〕在郷軍人分会の、教官に選抜されて、週に何回か、浦河さ、教育に行くのよ。貧乏だから自転車買えないでいるべ…
（小川）歩いて行くんですか？
（富菜）兵隊から帰ってきたばかりだからな、金もないべよ。
でこんど、孫ばあさんいたからな。で孫ばあさんから何とかかんとかして自転車、国産の自転車買ってもらって、で乗って、途中さ行けばパンクして乗れない、でどうかして浦河まで走らないばなんない。そうやって苦労したもんだよ。在郷軍人分会では。
（小川）けっこうな距離ですよね、こっから浦河っていったら。
（富菜）三里ある、三里。
（小川）それも、週に何回か通う…
（富菜）週に二、三回ぐらいあったかな。
その頃は、今度、おっかちゃん、母さんは、嫁にもらったから、おっかちゃん、田んぼにいるべや。俺、走って歩いているべや、馬鹿みたいなもんさ、まるっきり。最後には、なんか、模範軍人として、表彰されてるけどね。それで、みんな、ごまかされて。そういうものばかりしか持ってないんだ、俺。なんもないんだもん。なんも。金もない、何もない。俺さ与えられたもの、そういう、賞、そういう賞しかない。みんな貼ってあるけどね。
〔中略〕
（小川）現役は二年？
（富菜）二年、いや、三年近い。三年ぐらいだ[(2)]。
（小川）で、帰ってきて、それで今度ここで、在郷軍人の。

（富菜）うん。で、何ちゅうんだ、軍隊では、まあ、早いこと言えば優秀なほうだったから…
（小川）軍隊でそれなりの成績がないと、帰って在郷軍事の世話しろって言われませんよね？
（富菜）〔兵役から帰って〕きたけすぐ、お役命令の、教官なってけれ、教育の？？って。
（小川）それやっぱり行進のしかたとか銃剣とか教えるんですか？
（富菜）いやいや、一切よ。軍隊の中味一切よ。銃剣って、そったら、簡単なもんでないんだよ、鉄砲の撃ち方からみんな、教えてやきゃないんだよ。また、その時になったら、こういう田舎の者たち、何でもかんでも、猫もしゃくしも、みんな、竹槍持たして、何かかんか持たして、敵さ向かわせるという計算だけなんだ、ね、その頃は。何でもかんでもみんな、使わなきゃなんないんだ。
（小川）それを、じゃあ、しばらくやっているうちに戦争が終わった…
（富菜）そうそうそう、うん。だから、また兵隊に行かなきゃなんないもんだと思って、俺のおじさん、おじさん、父親の弟、おじさんが一人いてね、そのころ、日本刀、一本持ってたんだ。それ「けれ」って貰って、こんど召集来たら、これ持ってって、こんど〔は自分は〕下士官なるからな。今度来る時は、来たら、行かなきゃなんないんだし、行ったら、あっち行ったら軍曹なんなきゃなんないし、軍曹ったら刀なきゃいけない、敵の中にもぐりこんだら、刀持って、ふりかざして、飛びかかんなきゃなんない。そういう目的でよ、「日本刀けれ」ってもらってよ、で用意してたんだ。とうとう、召集令状来ないかった。（笑い）
（960229）

2　北海道アイヌ協会創立のころ

創立準備の動きのこと

（小川）〔アイヌ協会が〕出来た最初の大会の年からもう、あっちこっち、それこそ浦河から富菜さんたちもいらっしゃってるし、その、胆振の幌別とか伊達の方からも白老の方からも人が来てるっていうことは、やっぱり〔昭和〕21年の３月より前に、札幌以外のいろんな場所でも、〔協会を〕作るぞ作るぞっていう話あっちこっちでやってたんじゃないかと思うんですよ。
（富菜）あの、こっちの、北見のほうにも、釧路のほうも始めてたということは聞いてました。
（小川）だから、富菜さんなんか21年の３月静内行くときにね、「明日行くぞ」っていきなり言われたんじゃ、たぶん、なくて……
（富菜）はい。
（小川）もうちょっと前から、こんどこんなもの作るぞ、っていうふうな話にはなってたんじゃないかと思ってて……
（富菜）いや、そのためにね、下準備できてるわけよ。お前は会計書記だと、お前は理事長だと、監事はお前とお前だと、ちゃんと下準備して我々も行ってる。
（小川）やっぱりそのためになんかみんなでこのへんで集まってたりとか……

（富菜）そうそうそうそう。

〔中略〕

（富菜）そのときにね、大衆館[3]って…、あそこで下準備、準備会やったときにね、もちろん小川佐助[4]が先頭だけども、向井先生[5]から、知里さん[6]から、全ての先生がみんな来てるわけ。

（950117）

北海道アイヌ協会創立大会のこと

（富菜）そして、その時に面白いのにはね、なるほどアイヌらしいなと思ったんだけども、司会者があれ門別かどっかの人ら来てるんだ、誰だかわかんないんだ、名前。あとでね、道の事務局の偉い人になってた人だけども。向井山雄先生が、仮議長で始めたときに、「どういう名称つけたらよろしいでしょう？」って、こう言葉、出たのよ。そしたらね、座ってる、椅子、椅子でみんなこう、俺、４列か……３列か４列くらいの前からね、座ってた。そしたら、ひょっとしたここにね、大きな体格の、おっきなおやじ座ってたんだよ。おれ、どこの人かなあと思ってたんだけども。この人が「はい」って手あげて、「アイヌのことだから、アイヌでいいんでしょ」って、こう言った。「はいそれでは、アイヌていう名称にしましょう」と。これで決まった。一発で決まった。それ、後で調べてみたらそのおっさんな、そしたら、鹿戸才斗[7]って……

（小川）ああ、それこそ日高門別の……

（富菜）うん、門別の軽種屋。大物さ。

（小川）村会議員やった…

（富菜）はい。こうなってる〔と、体格の大きさを身ぶりで示して下さった〕。格好も言葉も体裁もないんだけどもね、「アイヌのことだからアイヌでいいべい」ではい一発で決まった。忘れないんだ、そういうことは。

（小川）いやそういうのやっぱり、出てる人でないと、僕ら、こういうの〔『北の光』創刊号〕にね、会議は開いて、開きましたと、みんなたくさん来て意見言って終わりました、って書いてあるけど、こういうときの様子って〔資料を読んでいるだけでは〕わかんないでしょう。これ例えば、終わったあと弁論大会あった[8]とか書いてあるけど、これ……弁論大会のあいだずっと、ご覧になってました？

（富菜）うん。

（小川）前の日から行ってとか、日帰り？

（富菜）いやいやいや。２日ぐらい行って泊まったよ。

〔中略〕

（小川）けっこう人来てたんですか？

（富菜）大勢だったな[9]、だいだい、北海道中のあらましの幹部連中はみんないたからね。顔ぶれば、これ殿（との）級ばかり多いんだもの。われわれみたいな、そこらへんの者寄せ集めなんかいないわい。

ピカ一ばかり集まっとる。
（小川）あとなんかお金の話になるけど、それやっぱり自費で、どっかから交通費出たとかっていうことはない……？
（富菜）ない。そんなものない。実費だよ。
（小川）そこは、その後と違いますよね。
（富菜）うん。お前たち来るんだったらこれだけ領収〔領収書〕けれ、とかって誰もやってくれた人もいないしよ。
（950117）

（富菜）面白いんだよ。俺ね、そのころ、あんまり、そういう会合ないし、出ても歩いてないし、ウタリでもどういうのいるんだか、静内でどういうのいるのか、門別さ行ったらどんなのがいるのか、なんもわかってない時代だ。兵隊から帰ってきたばっかりだからな。〔中略〕だからまだ、その兵隊の、中味抜けきれてない頃だもの、俺の。アイヌ協会もくそも、そんなもの、眼中に無い頃、知らない時、何して騒いでんだかわからないかったもの、最初は。
　ったら、俺の、椅子二つ三つおいてそっちいて、でぶった親爺が、でっかいのさ、向井山雄さんて、支部長〔理事長〕やった人、アイヌ協会の、初代の、支部長〔理事長：向井山雄〕さんが、仮議長として、演台さ上がってもの言って、それで議長決めて話しかけた、そのときに、どういう協会の名前付けたらいいか、って訊いたんだよ。したらそこに座ってた親爺がね、「アイヌのことだもの、アイヌでいいべさえー！」って、こう言ったんだ。
（小川）でっかい声で。
（富菜）ああ。「こういうものの言い方、これ、どこのアイヌだこれ」と思ったもの、俺な。たら、それが、門別の鹿戸才斗ちゅう人だったんだ。後で俺調べたんだけどな。
（小川）誰か教えてくれたんですか、それ。
（富菜）いや、後でわかったんだ俺、調べたの。…だから、名のある人なんだちゅうの。だからいっぺんパン〔で〕それで通っちゃったんんだよ。「アイヌでいいかべ」って。へへへ。
（小川）みんなそれで、「ああ、そうだな」っていう感じで…
（富菜）はいはい。それでも、はいはいで〔拍手しながら〕みんな喜んでんだもの、〔そのように〕なるさな。
（960229）

占領軍と協会幹部との会談について

（富菜）あのね、こんなもの、そこ[10]に結びつくわけでもないなと思うんだけど、聞くだけ聞いておいてくれ。

終戦で、マッカーサー元帥が日本さ来たでしょ、その時に小川佐助、呼ばられてるんだ。会談してんの知ってるかい？小川佐助と、マッカーサー元帥。

（小川）マッカーサーとですか？マッカーサーの部下じゃなくて。

（富菜）マッカーサー、マッカーサー元帥。うん。

（小川）マッカーサー本人と。

（富菜）うん、こらそうだよ。東京で会ってる。

（小川）東京で。

（富菜）うん。

そのとき、どういう話したか知ってるかい？

（小川）独立するかとかっていう話のときですか？そうじゃなくて……

（富菜）うん、あのね、「あんたたちは何人種だ」っちったの。「アイヌです」って言えばよかったのを〔中略〕、「立派な日本人です」て回答したの。じゃ、それで終わり、て。ね、これだけ覚えといて。これ、それこそ〔北海道ウタリ協会〕50年記念〔にちなんだ話[11]〕だでよお前。マッカーサーに小川佐助の会談だよ、これは。「アイヌ人種です」て言えばよいのに「立派な日本人です」「ああ立派でしょう」と。〔少し間あく〕これで終わり。

（小川）その話、そのマッカーサーとのときにそういうやりとりして、それはもうそれで……

（富菜）そうそうそれっきりで終わり。

（大谷）アイヌ民族の権利とか、そういうものも別にアメリカ人は見ない、っていうか……。

（富菜）うん。なんも、考えてくれないでそれで終わりさ。日本人だもの。「立派でしょ」ちったの。

（大谷）よその国にアメリカが進駐した場合には、その〔土地の〕先住民なり何なりの権利ある程度こう、ありますよね。認めて…北海道の場合、なかったですか？

（富菜）何ちゅうんだ、早いこと言うと、少数民族、ね、これ、日本の少数民族だとマッカーサーは見てるわけよ。そう言うかと思ってきいてるわけよ。上は、野郎ははな。ところが小川佐助まじめだ。馬鹿だよな、「立派な日本人です」と[12]。

戦後すぐの総選挙[13]のこと

（小川）やっぱり票集めというか、選挙運動来ました？

（富菜）した。やったやったやった。盛大なもんだよ俺ら先頭なってやったんだもの。

（小川）ここだったらやっぱり〔小川〕佐助さんの……

（富菜）はい、えりもまで、ジャーッと、庶野まで。

（小川）あ、応援に。

（富菜）うん、日高、端から端まで歩いた。

（小川）車……

（富菜）歩いたり、自転車で。もうもうもうもう、困った連中ばかりだから、何、車よ。

俺、要所要所で、おっきな町さ行って要所要所に俺行って、みんなあの、青年部だとか、配下のもの動かす役目って、要所要所にいてよ、俺、やってたんだ。

（小川）なんか、街頭演説みたいな……

（富菜）ううん、あんまりそういうことはしないけども、動きかたは指導してたよ。動きって大事なことだからな、選挙運動ってのは。ばかぽー〔馬鹿のようにポーッとしている、の意か〕としていたって駄目なんだ。

（950117）

協会の活動のようす

（小川）それでね、これ〔『北の光』創刊号[14]〕は見覚えありますか？

（富菜）あります。

（小川）郵便で送られてきたものなんですか？

（富菜）どうだった……どうだったか、おれ手に入ってたなあ。

（小川）これ、出たのは昭和23年ごろになってて、こういうの、だから僕らはね、図書館に行けばあるとかね、ウタリ協会の本部に行けばあるのは知ってるんですよ。みんなのところにはどうやって送ったんだろうと思って……

（富菜）ありましたよ。見ました。見たことあるなあと思って、さっき出たから〔小川が鞄から取り出したとき〕すぐわかったもの。

（小川）これ、例えば、昔も会費集めたりとかしてたんですか？協会の支部で。

（富菜）会費は集めてたよ。運営費。額だとかわかんないけど。そしてね、われわれの事業起こしてたの。団体のね。あの、生活力のない、仕事ない、いろいろ、もう、貧乏人ばかりの集まりだから、ウタリは。だから〔生活に〕困った人間が多いわけよ。だから、営林署へ頼んでね、何百石って、あの、青木、丸太を、山から伐採して下げて、認可、許可受けて、それを下げてきて、流送、この幌別川、流送で、下げてきて西舎の警察の前の河原に揚げてね、でそれをみんなで、みんな一人ずつで配分して、みんな、なんちゅうんだ、持って行って、あの、柾、屋根の、葺く柾に割って作ったり、木工所で板にしいて壁に貼ったり、そういう、家庭の足しにしたの。そういう仕事は、われわれ浦河支部ではやったの。

（小川）それは昭和20……

（富菜）３年４年５年頃でないべか。６年ぐらいはあの、浦河支部は続いていたから。そのうちにね、本部のほうが、どうなったんだか、

（小川）わかんなくなっちゃった。

（富菜）わかんなくなっちゃったんだ。

（950117）

（小川）協会の目的ってこうだ、っていうふうなことっていうのはどんなふうに？
（富菜）だから俺いまいつでも言ってるけれども、「旧土人保護法」って知ってるか？ね、それを撤廃して、アイヌの新法を作ろうというのが協会の目的だったの。それしかないんだと俺言ってるの。
（小川）今、今ですね？。
（富菜）いやその時からずっと言ってる[15]。
（小川）その頃からもう「旧土人保護法」をなんかなくして……
（富菜）はいそれを無くしようというの。うん。
（950117）

（小川）〔協会の〕会費っていくらぐらいだった……
（富菜）月の会費よ、なんぼだったべなあ。
（小川）インフレとかなんとかでね、ものの値段も変わってる時代だから、いつもおんなじ額だったかどうかとかわかんない……
（富菜）いや、会費はおんなじだった。
（小川）おんなじ額で。
（富菜）おんなじだったけども、おんなじ、きちっとまとまってた。ちゃんと。そういうことにはね、不自由なかったんだ。なんも。そのためのどうのこうのていういざこざ何もなかった。ちゃんとしてたよ。うん。
（小川）きちっと家まわって集めるかんじ……
（富菜）いや、あの、なんちゅうんだ、班長さんちゅうか、地区地区に責任者をおいて、その人たちがいっしょけんめまとめてけれた。
（小川）毎月ぐらいの感じですか。
（富菜）はい、会費は毎月〔きちんと〕やってきたもんだ。これはきちっとしてたよ、うん。まったく、俺、会計書記だから。
（小川）ああ、そうかそうかそうか。
（富菜）俺責任者だもの。その方面の。これは立派なもんだよ。
　であの、登別の、何たけ、あの、寮の[16]、それを何とかしようというので、その浦河の割当てもなんぼって、みんな地区さこんど割り当てて、みんな、地区から、２万なんぼだか３万なんぼ集めたよ。あっち、寮に、登別に送る金な、２万なんぼだと思ったなあ。
（950117）

（大谷）この、アイヌ協会が、これから、設立して、これから動きがはじまる、っていうときに、アイヌ語っていうのを、どうしていく、っていうような、なんか、そういう意見っていうの、あり

ました？

（富菜）アイヌ語っていうの、その会合？

（大谷）ええ。集まった人たちの考えでもいいですわ。アイヌ語ってことに関心がありました？

（富菜）なんも、なんもそういうこと出たことほとんどね…

（大谷）そういうのは何も、守るというのは、出なかった…

（富菜）ぜんぜん出てこない。

（小川）だから佐助さんが、その、マッカーサーの時に、日本人、立派な日本人…

（富菜）「日本人です」って言ってるんだ。

〔中略〕

（小川）でも、変な言い方ですけど、ここに集まっている人のね、かなりな人はアイヌ語知ってますよね。単語聞いたことある、とかいうぐらいで言っちゃえば。

（大谷）大部分の人が。

（富菜）アイヌ語知っているよ、みんな。おれしゃべれないけど、俺だって聞くくらいだったらだいたいわかるもの。しゃべれ、ったらできないけどな。

（小川）お父さんがわりとそうだった、お父さんがわりとそういうふうに、もう覚えなくていいっていう…

（富菜）覚えなくてもいい、って〔いうことで〕言わないんだよ。一言も言わない人だった。まごばあさんも、母親も。

（小川）子供の前では言わない…

（富菜）ぜったい言いません。そして、そうすれとも、また、教えない。「アイヌばやめれ」つうんだから、うちの親父は。

（小川）学校へ行って勉強…

（富菜）学校さ行け、シャモと対抗せって。〔父は〕そやって教えて育ったんだ。

（小川）このへんなら、あそこの、杵臼の学校なら、例えば子供が100人ぐらいいるとして、100人もいないですね…

（富菜）二百人以上いたことある昔[17]。

（小川）でもアイヌの子供ってそんなにいないですよね。

（富菜）なんぼもない。だけど、その、わりとね、アイヌ差別だとか、アイヌのヘカチとかポンチョとかって言われたってね、昔、今でも差別扱いで騒ぎやってるけどね、ここの部落にはそういうことなかったの。シャモの中さ入って、俺が、そのアイヌのど真ん中、中にいて対抗して負けてないからね、学問してって走ったって何やったって人に負けてない。そういうウタリが多いかったからね、軽蔑されて馬鹿にされて苦しめられたウタリはいなかったわけさ。そこらへんは立派だと思ってるよ。野球だって３年生からやったから。〔中略〕陸上競技、浦河一の速い男だったよ。

（950117）

北星寮再建の会議に参加したこと

（富菜）登別で、森久吉さんの、旅館あって……、旅館、……うんそう北星寮。〔中略〕ウタリの浴場を作ろうと……。

それやるのに、おれその会合に俺出席したんだ。

（小川）どこでやった会合ですか。

（富菜）登別。

（小川）登別で。

（富菜）森久吉が経営してたやつな。

（小川）それで、会議〔は〕いつごろ？

（富菜）それがだなあ、何月何日とかわかれば……

（小川）会議あってしばらくして北星寮建ったんですか？

（富菜）いや、名前つけてなおしたんだよ。

（小川）あ、名前をそういうふうにつけたんですね。

（富菜）ああ、そうそうそうそう。そのときに、向井先生から知里さん兄弟から辺泥さんから、

（小川）ああ、あの、鵡川の辺泥さん。

（富菜）うん、みんな集まってその会合持った。浦河からおれ代表で行ってね。支部長行かないで俺が行ってきたんだ。初代の浦河の支部長は志駒文治郎ちゅうんだ。

（950117）

数年経つと協会の動きが見えなくなったこと

（小川）だいたい〔昭和〕25、６年、いま富菜さんがおっしゃったので26,7年ぐらいまでだから、そのころまではその、いろんなことやってたんですね。

（富菜）はい。うん、だけど、何したんだかどしたんだか、音沙汰なくなって。しぜーんに消えてしまったね。

（小川）その後、次にね、札幌のほうで何かやってそうだ、っていうふうに見えてきたのって、いつごろまで飛んじゃいます？

（富菜）うん、それからねえ、なんかこう、いろいろこう、耳にはさんでたけども、大した、ピッと伝わるものなくているういちにね、今度野村先生の名前で出て来るようになったんだ。

（小川）そしたら、これコピーだからわかんないかも知れないけど、これ〔『先駆者の集い』創刊号を見せる〕こういう大きさ〔Ａ５判〕の本だったんですけど、この本は、あんまり届かなかった……

（富菜）そん時はな、届いてない。このごろだ、『先駆者の集い』来るようになったのは。

（小川）はあはあはあ。この大きさの『先駆者の集い』っていうのは……

（富菜）それ見るのは俺初めてだ。
（950117）

３　浦河支部の創立と活動

支部創立のころのことなど

（富菜）そしてこの時〔アイヌ協会設立時〕にね、あの、我々の支部もこしらうぞという話し合いもできて、こんど、支部、この向井山雄先生、小川先生、あの、何たけ、登別の、森久吉、この人がたがね、ここへ乗り込んで来て、あの、西舎で、西舎って地区あるんだ、そこで、個人の家（うち）を借りて、一晩ね、あの、下準備して、明日総会やるっていう今晩、会合やって、西舎の小学校の屋内運動場借りて、もう決まってんだよ、そして段取りしてるわけよ、このへんの個人の家借りてね、すぐ近間まで。そして、向井先生、向井山雄先生がね、他の先生たちは寝てしまってんだよみんなそこらへんで（小川：ああ、夜中ね）夕方よ、で、その、会則、会の会則を作る。お前、会計書記だから書け、お前、俺が言うから俺の言うとおり書け、そして、夕方始まったら朝５時までかかった。ということは、慣れないべさ、そういうことなんか、俺が。何もわからないべや。書いているんだけども、今度、その言葉の字が違っていたりね、そこの言葉さ書く字がそれ違うんだって、また書き直しさせ、出来上がったの朝５時、夜明けてきたよ。それで次の日、屋内運動場借りてあったから、そこで浦河の、何ちゅうんだ、浦河支部を作った。これが正解だよ。
（小川）こうやって、これ大黒座、大衆館に集まって、それから静内へ行ったんですか？
（富菜）いやいやいや。
（小川）静内でやってから……。
（富菜）静内が最初できてしまってるんだ、３月に。これやったのが６月さ。
（小川）６月ぐらい……。
（富菜）うん。昆布とり時期さもう入るときなんだ、漁師の。だから忘れないんだ、それは。
（小川）あ、忙しくなるから……
（富菜）うん。そして、その中には、俺の親戚の者たち浦河でも、みんな漁師の人たちが、支部の理事に選ばれた人たちがいるから、忘れない、それは。
（950117）

（小川）今でこそ例えば生活館なんかあってね、そこで集まって会議してますけど、当時、その頃無かったですよね、そんなもの。（富菜：ない）誰かの家に集まって……
（富菜）はいはいはい。
（小川）わりと、集まる〔のは〕この人の家、って決まってた感じ……
（富菜）いやいやその時その時にね、都合で。だからさっき〔言った〕、明日西舎で、浦河支部作

るんだっていうときも、会合なった家（うち）の近所で、やっぱり富菜っていう家だけども、〔中略〕そこで、こういう一軒屋を借りて、そこで、向井さんから森さんから、向井山雄先生から、そういう人たち来て、段取りしてけれたの。森さん〔の〕カバン持ちだ。小川〔佐助〕先生のかばん持ち。

（小川）森久吉さんなんかとは直接あんまり話……わりとよく話……

（富菜）森さん？森さんだらしょっちゅう会ったよ。

（950117）

（小川）知里さんもね、ときどきここには来てた……

（富菜）知里さんもここの沢さ、３回ぐらい来てる……

さっき言ったその、支部長、初代支部長になった志駒さんの家さね。俺の家は来なかったよ。支部長の、一番上の人のとこさ来て、寝泊まりしてね、そこで俺らが行くのよ。行って、話し合い……

（小川）やっぱり、協会のこと話したりとか……

（富菜）うん、うん。

〔中略〕

（富菜）うん。兄弟でなんかしらんけど二人で来てたよ。高央（たかお）さんたち、真志保さんと。

（小川）二人で。

（富菜）うん。不思議に二人で歩いてたね。

〔少し間〕

一番印象に残ってるのはね、志駒さんの家さ行けば、炉、おっきい、昔の家だからおっきい炉なのよ。

（小川）あ、炉があったん……

（富菜）炉、炉きってあんだ。

（小川）うんうん、家の中に。

（富菜）うん。それでここにね、もの干し〔に〕、いろいろ都合のいい、あの、吊ってか、枠組んであるわけよ。そしたらねえ、ここに座って、お互いにこう、みんな炉端で話してるとさ、で、おしっこするとか何とかって高央さんがひょいと立つわけよ。それでガーンとここさ頭ぶつけるわけよ。それば弟〔の〕真志保さん、「頭のわるいやつだなあ、俺だら一回ぶつけたら二回めぶつけない」って。（笑い）兄弟でそやっていたもんだよ。何となしにそのな、憎めない、仲良しな人だなあと思って見てたんだ。それで兄貴はまた、立つたんびにぶつけるんだ。

（小川）忘れちゃってるんだ。

（大谷）みんなで大笑いでしょそんなときに。

（富菜）笑いよ、回りで。それでその、真志保さんていう人は、あんまりこう、ニヤラニヤラしたり、冗談言ったり、なんか言う人でないんだけども、「俺だら二回目ぶつけないんだけどなあ」ってやるべ。

（950117）

（小川）この大衆館で集会やったころはこの界隈にもけっこう人がいたんですね。
（富菜）いたいたいた。
（小川）けっこうみんな行きました？このへんの人みんな…
（富菜）ほとんど行ってる。
（小川）ほとんど行ってるぐらいですか。夫婦揃って、っていう感じですか？
（富菜）そうそうそうそう。健康な者だったら皆行ってたよ。
（小川）それぐらい人が集まったのはその時だけですか？あとはもう少し小さい集まりですか？
（富菜）いや、あの、何ったけな、それ、協会を何とかして作ろうという、何ちゅうんだ、基礎づくりやっただけで、それから今度、支部、支部っていう名乗り上げたのが、ここの、川向かいの、何ちゅうんだ、西舎小学校、尋常高等小学校の、屋内運動場借りて、そこで結成式やったんだ。
（小川）ああ、支部の結成式、
（富菜）はい。
（小川）そこで。その時もやっぱりじゃあけっこう人が、
（富菜）いや、このときはみんな集まったよ。
（960229）

（小川）富菜さんにね、会計書記〔をやらせた〕っていうのは、やっぱり、何か、「こいつはこういう事できそうだ」っていうふうに、回りが見てたから…
（富菜）そうでないのかな。「お前、やってけれ」って、上から指名だもの。
（小川）それ、上っていうか、このへんで支部長やってた人たちとかとは、当然前から付き合いはある…
（富菜）みんなが、あの、何ちゅうんだ、親戚づきあいみたいな、仲のいい、和合のとれてた人たちなんだ、ばっかりだったからな。
　だってほら、よくよく考えてみたら、会計書記なんて、やれるような学問、持ってる者もいないんだわ。字もわかんない、書く字もわかんない…
（小川）けっこうそれと、細かい計算とかやって、マメに記録とんなきゃいけませんもんね。
（富菜）うんそうそうそう。
　だから、俺も最初、何も、何のことだか、わかんないべ。向井山雄さんかて〔らに？〕、晩方五時ごろから朝の五時ごろまで、絞られたんだけども。会計書記やんなきゃなんないもんだから、この、何だ、会則ちゅうか、定款、これ作らなきゃ明日会合できないべや。西舎の学校でやったんだ。何もないで、明日やるべ、って言って、集まってんだから。ね？向井先生こんど、「お前そこれさ座れ」と、そこさ座ってよ、それで、会則作るべって。定款だ、まあわかりやすく言うと。それ書くったって、そういうことやったことないから、字違ったとかってな、それはもう、出来上がるの、

明日の朝、夜明けてだよ。
（小川）ああ、じゃ、徹夜…
（富菜）うん、向井先生に絞られてな。
（小川）向井さんとは、そういうころがほとんど初対面？
（富菜）初の対面よ。
（小川）厳しかったんですか？わりと。
（富菜）え？
（小川）厳しい人だったんですか？
（富菜）いや。
（小川）そうでもない。
（富菜）そういう人でない。
…いやあ、偉い人って、厳しくない。優しい人だ。
その頃には大学出ている人ってあの人しかいなかったって。
（小川）その頃はね、大学出ている人が少なかったですからね。
その、西舎の小学校でやったときに来たのは向井さん、他所から来た人は向井さんぐらいですか？
（富菜）いや、北海道の偉いさんは、…（小川：あと、知里さんとか？）うん。全部来た。十勝のほうからも、旭川のほうからも、全部来たよ。
（小川）さすがに十勝、旭川って言ったら、もう前から知ってる人とか、そのとき知り合いになった人とかは、特にいるわけではないですか？
（富菜）いや覚えた人はちょいちょいいたよ、俺はな。したら見たことないべ。（小川：その後ね？）うん…いやいや、その頃だってよ。名前だけは聞いてるけどよ。
（小川）名前だけはこう、聞こえてくるもんですか。
（富菜）そうそうそうそう。
（小川）「ここにこういうやつがいる」みたいな？
（富菜）うんうんうん。
（960229）

（小川）〔戦争が〕終わってじゃああれ、その、アイヌ協会みたいなもの作ろうって、わりとすぐ出てきた話ですか？
（富菜）すぐ。もう、すぐ。
（小川）すぐ？戦争中はさすがにそんな話あんまりなくて…
（富菜）なんもない。なんもわかんない。
（小川）その志駒さんなんかとは、さっきも訊きましたけど、戦争前のころからわりと付き合いはあった…
（富菜）俺のね、いとこ兄貴、自分の、そこはみんな、俺の、あれなんだよ、弟の、小川のおやじ

の、妹の家なんだよ。そこの婿さんなんだよ。
（小川）じゃ、おじさんにあたる…？
（富菜）いやあの、あのね、そこの姉むすめの亭主だから。
　俺の身内だよ、早いこと言えば。おらほうの父親、長男なんだ、その妹のカマドなんだよ。
（小川）じゃあ、富菜さんとこへ、協会できるぞ、って話最初に持ってきたのは志駒さんとかですか？
（富菜）うーん、いや、何とはなしにみんな、集まってね。
（小川）なんかそんな雰囲気っていうのがあって…
（富菜）うんうん、あって。まあやっぱり集まるのは、志駒さんの家を中心に、みんな、浦河の街のほうからも、こっちの西舎のほうからも、みな集めて、何となしにみんな集まって、「お前これで集まれや」って、命令して、誰か、指導してやった者もいないんだよ、そのとき。自然のうちにできてきた。そして、「お前幹事になれ」「お前理事になれ」って、みんなこう、決めていった。みんな、俺は、俺はみんな〔から〕そのころから〔呼び名は〕愛吉だから「愛」「愛」、「愛は、お前」（小川：「愛」って言う…）ここの人、ここらへんの人たち、みんな俺さ「愛」って言うんだ、年上の人たちはな。愛、お前は、何だ、会計書記やれ、って。もうそやって自然に決まっちゃうんだ。
（小川）それでそれからずっと会計のしごとを？
（富菜）うん。
　だからそういうふうに前もって決まってたからね、セントラル劇場さ集まって会議をやったときも、その段取りに俺たち、行った。気の合った、お前支部長だ、お前理事だっていうふうに、練ってるの。
（960229）

　そして、西舎で、ここ、支部結成するっていう、明日やるっていうときの今日、西舎で、この富菜さんて、今札幌さ行っていないけど、そこにね、宿借りて、小川さんの身近な家だったらしい、小川佐助さんの。〔中略〕で、あの人の顔で、そこ、何たけな、会場にしてもらったらしいんだけども、ふふ〔笑い〕、向井先生ここ座って……
〔中略〕
（小川）支部の規則ですか？
（富菜）支部の。
（小川）けっこう長い、全何条とかっていう長いやつ…
（富菜）うん、そうそうそうそう
（小川）それはこう、向井さんが言ってくのを紙に書いてくかたちですか？
（富菜）そう、俺はな。
　夕方、五時か四時ごろ始まる。明日の朝夜が明ける……
（小川）墨で書いていく？

（富菜）いやいやいや。あの、何ちゅうんだ、ボールペンよ。最初、下書きとして、エンピツでみんな書いたんだ。
（小川）ずっと二人きりで起きてたんですか？
（富菜）うん？
（小川）ずっと、富菜さんと、向井さんと二人で起きてずっとやってたんですか？
（富菜）あとの者寝てしまっていないも。二人だけで、夜明けちまった。
（小川）で、その朝もう大会…
（富菜）そう？？、8時ごろから、会議始まって。あの人偉い人だなあ
（小川）全然眠たそうでもなく？
（富菜）かっこうみたいな、何もしてないよ。？？？びくっともしてない。すごい根性だなと思って、そう思ってるよ今でも。
〔少し間〕
（小川）それは、西舎の小学校のときは、その、このへんの人が集まった感じですか？
（富菜）いや、全部集まったよ。浦河の向こうからも全部。
（960229）

初代支部長のことなど

（富菜）志駒さん。年だいたい10ぐらい違うんだ。
（小川）志駒さんのほうが10上……
（富菜）うん。
（小川）けっこうがんばった支部長……
（富菜）いや、あのね、学問はない人だけども、できる人だったわ。頭の冴える人なんだ。ほんとに、〔議論を〕さばいていくのに〔中略〕達者な人だから。学問はないんだよ、昔の人間だから。大した学問は、読み書きは大したものでないんだけども、頭の程度が違う。これだけの人はちょっとやっぱりいないわ今でも。
（950117）

支部の活動のこと

（小川）この前うかがったので、支部の仕事で、材木を山の上のほうで、とってきて、ずーっと流して、このへんで陸に揚げて家の建具にしたっていう、話ありましたよね。あれは、やったのは一回だけですか？
（富菜）一回だけ。
（小川）それは、まずお役所のほうに誰かが行って、「こういうことやらしてくれ」っていう…

（富菜）そうそうそう。うちの支部長。

（小川）支部長が、役場、やっぱりあの浦河の、役場のほうに…

（富菜）ううん、営林署に行ってね、（小川：日高の営林署？）浦河にあるんだ。

（小川）誰かが言い出したんですか？支部長が考えたんですか？

（富菜）いや…支部のみんなで考えて。

あのね、ということは、なんちゅうか、みんな、貧乏人ばかりだから、壁もボロボロなってる、屋根もボロボロで雨降る、何とかして、屋根葺きたいもんだ、壁、ちゃんとした風の通らない、家さ入りたいもんだていう考え方から、みんなそういうこと出てきたわけよ。「じゃ、やろうか」って。一生懸命やったよ、みんな。

（小川）で、支部長は営林署へわりとこう掛け合いに行って…

（富菜）あの、そういうことまた一生懸命やる人だった。なんのこともそういうことの機転はきく人なんだよ。支部長ちゅう人はね。読み書きさせれば大したことない〔けれど〕、そういう働きさしたら、腕前持ってる人なんだよ。そういうことさ、かけてはできる人だったんだ。そういう器用な人だったからな。

（小川）それで、材木のＯＫとってきて、今度はまたみんな集めて「今度こうすることになった」っていうような…

（富菜）うん、して、切る、伐採、期限の決まって。で、ったら、何月何日からみんな伐採…あの、何ていうかな、その人、人の能力によって、またあの、山さ連れて行って、木倒して、木材切りこなしてやれるっていう腕のものって、そう居るもんでないんだから、そういうものに適した者は、そこさ出席せえと。

それで、今度それで〔切り〕出してきて、川さ落として。落とすのはどういう人間〔ができる〕だし、「お前さやれ」と、で「流すときはみんなでやるべ」と。みんな、こう、分担決めて、わりふり決めて、そうして三日ぐらいかかって持ってきたよ。

（小川）けっこうそのときも、このへんのアイヌの人たちは総出で。

（富菜）いやほとんど総出だな。うん。

（小川）総出で。働ける者はみんな行くみたいな。

（富菜）うん。働ける動ける者みんな出てやってけた。

（小川）だいたい三日ぐらいかけて全部切り出して。

（富菜）〔切り出して〕くるだけはね。で河原、あの、西舎の、何ちゅうんだ、今、キョウワのとこ、あそこらへん今でも雰囲気は全然違うけどもね。広場、河原の広場あったんだ。橋、ちょうどその橋、今出来てしまって……

〔中略：以下、地図を広げながらのやりとり〕

（小川）〔材木は〕ここで〔川に〕落として、このへんに揚げてきたんですね？

（富菜）待てよ、…これ、ピスカリ館だからここらへんだ。この河原だ。ここの河原だ。

（小川）ここへ揚げてきて、ここへみんな取りにきて…

（富菜）それで、今度ね、一戸は、一戸わりに、割ったわけ。（小川：「お前の家こんだけ、お前の家こんだけ」みたいなの…）あの、なんちゅうか、出て昼間働いた日数から、いろんなことかんみして、なんちゅうかな、考慮に入れて、そしてね、「お前の」〔というふうに〕、山にこさえたわけよ、こう。

丸太、木、材木によってね。屋根の、柾われるような木は切って、これ市場が違うんだだから。板、ただかくれいた製材するだけだら、これクズでも何でもいいんだから（小川：屋根はちょっとそうはいかないと）屋根は簡単なもんでないんだわ。一等品でないばできないんだわ。割るもんだからな。（小川：一等種？）ほらもう、わる、柾割る木ったら、ちょっともう、どうたらこうたらであるんもんでない。難しいんだよ、それ。それわりふりして、屋根の柾欲しい人には、柾何本か入れて。俺、それで柾割って、屋根葺いたよ。その時。その家から、これ〔今の家〕二回目だけどもな。俺もその頃は屋根持ってたんだから。もう、すぐ、屋根屋頼んで、来て、家の前で柾割りさせたさ。（小川：その時）うん。様似さ行ってね、商売人頼んだけ、ここで家泊りしてもらって、ここで全部割ってもらって、屋根葺いてもらって。

（小川）みんなすぐそんなふうにできた？

（富菜）みんなやったよ。ほとんど一斉にやったよ。

（960229）

（小川）支部全体で集まって会議したのはその一回〔西舎小学校での集まり〕…

（富菜）それしかないな。

（小川）あとは、わりとこうマメに集まって、こう、会費集めたりとか何とかっていうのは、別に……

（富菜）一年に一回、やるっていうか、あの、何ていうんだ？会館、東幌別の会館借りたとか、西舎の裏の会館借りたとか、そういうとこ、借りるの。やるときはちゃんと借りれるの。学校は借りなかったと思うよ、？？は。

（小川）あ、会館借りて集まるっていうのは、ときどきやってたんですか？

（富菜）うん。

（小川）それはまた役員だけが集まるようなかんじ…

（富菜）いやいやみんな集まる、もう……

（小川）みんな集ま……

（富菜）町会（総会？）よ。

（小川）それ支部の…

（富菜）そう、全部支部の。

５、６年の間だけだったけどな。

（960229）

Ⅲ　註記

註記では、富菜さんの語った内容に即して、主要な人物や時代背景の説明を試みた。なお、富菜さんの談話中で述べられている出来事の年月日等と、「はじめに」や以下で引用した文献の記述とが若干食い違う場合がある。もちろん、人の記憶には多少のズレが生じることは避けがたいし、いっぽうでこれらの文献の記述にも典拠を欠くものが多い。現段階の筆者としては、こうした食い違いのほとんどについて、正誤の判断は留保しておきたいと考える。このため本稿では、相当重大な事実関係に関わる部分以外については、こうした食い違いについて必要な範囲において指摘するにとどめ、特段のコメントを加えていないことを断っておく。

⑴　1936年9月から10月にかけて、北海道で行われた陸軍大演習に併せて天皇の北海道「行幸」があり、札幌、函館、旭川、帯広において学生生徒、青年団、在郷軍人会等の「親閲」があった。記録によれば札幌では日高支庁管内のほか札幌、小樽、石狩、後志、胆振の青年団員が参集したが、このとき富菜さんは地元の青年団の旗手をつとめたということである。

⑵　当時の兵役法では、前年12月１日からその年の11月30日の間に徴兵適齢（満二十歳）になる者が徴兵検査を受け、合格した者の中から選ばれた者が服役する。現役は２年であるが、富菜さんは中国大陸に出征し、足掛け３年後に除隊となり、その後在郷軍人会に属した。

⑶　大衆館は浦河町の市街地にあった映画館である。『浦河町史』（浦河町、1971年）によれば、1930年に鱗別橋のたもとに開館、のち大通り５丁目に移転、1952年にセントラル映画劇場と改称した。富菜さんの語りに「セントラル」と出てくるのは改称後の名称のことである。

前掲『40年のあゆみ』によれば、1946年８月に大衆館にて「浦河支部創立のため」の「準備会」を開催し、同年10月に西舎尋常高等小学校運動会場にて創立大会を開催している（11ページ）。基本的な経過は富菜さんの談話と合致する。

⑷　小川佐助：1905～1987年。浦河町生まれ、浦河の高等国民学校を卒業、競馬の騎手からのち調教師となり、後年日本調教師会役員をつとめる。北海道アイヌ協会には設立時から参画し常務理事を努めたが、京都への転居とともに顧問的な位置に転じる。1974年の財団法人アイヌ文化伝承保存会（現在のアイヌ無形文化伝承保存会）の設立に参画し初代会長をつとめた。以下、人物の略歴については『北海道大百科事典』（北海道新聞社）などを参照した。

⑸　向井山雄：1890～1961年。有珠村（現伊達市内）生まれ、聖公会伝道者ジョン・バチェラーに師事し、立教中学、大阪聖三一神学校をへて立教大学神学部へと進学、聖公会神学院を卒業し伝道者となる。新冠、平取、有珠等の教会・講義所で伝統活動に従事。有珠に戻ってからは伊達町議等の公職もつとめている。北海道アイヌ協会には設立時から参画し初代理事長を務めた。ジョン・バチェラーの養女となり歌人としても著名になったバチェラー八重子は姉。

⑹　知里真志保のことと思われる。知里真志保とその兄・高央は創立当時のアイヌ協会の活動に参加、理事をつとめていた。

⑺　鹿戸才斗：門別村（現門別町）生まれ。軽種馬育成に従事し、門別村議をつとめる。アイヌ協会には創立当時から参画し副理事長をつとめた。

⑻　『北の光』創刊号などによれば、この日は午前中に創立大会を開催し、午後から「全道ウタリーの弁論大会」（『北の光』）を開催している。出場者「三十余名」、一等は秋田春蔵氏（現北海道ウタリ協会理事長）であった。

⑼　創立大会参加者は、『北の光』によれば「会衆二千余名」、『北海道社会事業』144号（1946年３月）によれば「同族約七百名」である。筆者の判断としては、『北の光』創刊号記事は後年のものであり『北海道社会事業』のほうが比較的近い数値ではないかと考えるが、それでも、この数字は近年の北海道ウタリ協会総会の参加者数に匹敵するか、それを凌ぐものである。

⑽　この部分は、その直前に富菜さんから、アイヌは「人種」なのか、今もそのような「人種」がいるのか、といった質問があったことを受けた会話の流れによるものである。

⑾　1996年が北海道ウタリ協会の創立50年にあたることから、富菜さんへの聞きとりに際しても、このことを何度か説明していたことによる。

⑿　ここでは「マッカーサーと小川佐助の会談」となっているが、管見の限り、アイヌ協会幹部が直接マッカーサーと面談した記録は確認できない。富菜さんの語る会談の内容から推測すると、これは小川佐助ほか３名とＧＨＱスイング司令官との会談を指すものであろうと筆者は考える。この会談については、参加者のひとり椎久堅市からの聞き取り記録が前掲『アイヌ史　資料編３』に掲載されているほか、増子義久「幻のアイヌ独立論を追う」（『朝日ジャーナル』1576号、1989年３月）がこの記録をもとに論点の整理などを行っている。

富菜さんの伝える会談の内容は、これらの記録で語られているものと大筋で合致する。そして筆者はむしろ、かかる事実が富菜さんのような人々の間に記憶され残っていることに着目したい。

なお、富菜さんがここでいう「馬鹿だよな」などの言葉は、前後の文脈をみれば単なる誹謗の意ではないことが伝わると考え、このまま掲載した。

⒀　参考資料の年表にも見られるとおり、戦後間もなくの衆議院議員選挙、北海道庁長官選挙、北海道議会議員選挙に、アイヌ協会の役員らの立候補が相次いだ。町村会の議員については戦前からも見られるが、このようないわゆる道政・国政レベルの選挙への立候補はこの時期初めて見られたものである。

このような動きに対しては、“アイヌの代表”を当選させようとする支援運動を見ることができる反面、アイヌ協会やその役員は選挙目当てだったのではないのかいう批判も、当時の『アイヌ新聞』紙上等に少なからず見ることができる。

ここでは、このような立候補そのものへの評価は措き、候補者らのような、言わば運動の“花形”的存在のいっぽうに、富菜さんのような“縁の下”的な役割を担った人たちがいるという、それ自体は当たり前のことを、改めてではあるが確認しておきたい。

⒁　『北の光』創刊号などを持参して富菜さんに見てもらったものである。

なお、『北の光』は刊行が確認されているのは創刊号のみである。その後間もなくしてアイヌ協会の活動が下火になったこと伴い、２号以降は刊行されなかったと見てよいだろう。

⒂　「北海道旧土人保護法」の撤廃ないし改正論の存在については、年表に見られる請願やアイヌ協会の創立や衆議院議員への立候補を報じた新聞記事に、「当日の準備委員会では自発的に北海道旧土人保護法の撤廃を指導当局に要求〔中略〕といふ意見も提唱され」（「同族衰亡を挽回／自主復興へ／旧土人保護法の撤廃も要求／アイヌ協会結成準備会」『北海道新聞』1946年１月26日付）、「旧土人保護法の撤廃と政治的問題の解決を図るためアイヌ民族のうちから代議士を送ることになり」（「アイヌも立候補／新日本建設に一役担ふ」『室蘭民報』1946年２月６日付）と報じたりしていることからもうかがえる。

いっぽうで、発足後のアイヌ協会の活動方針の本文の中には、このような法令の改廃を直接要求する文言が直接含まれていない。これは、同協会が本部を道庁内に置き、『北の光』創刊号誌上で、小川佐助や向井山雄が、協会の目的を「アウタリーの向上発展、福利厚生」にあると述べているような、発足後における協会の立場の取り方を反映しているものであろうと推測する。

⒃　登別温泉に建設されていた北星寮のことを指す。1948年、国と道が補助金を拠出して設置（一部の資料には「1946年」とあるが当時の記録から48年と判断する）、アイヌ協会に経営を委託した。当初の設置目的は「北海道旧土人並びに引揚者戦災者及び一般生活困窮者の収容保護」となっている。既設木造建築の取得による設置であったため、当初から建物の傷みがはげしかったといい、利用率も低かったという。このため修復計画中のところ1961年の水害により流失したが、道、市町村ほかの寄附およびウタリ協会各支部からの負担金により新築、「うせない荘」として経営が続けられたが利用率は向上せず、1969年に廃止された。（以上の経緯は、『先駆者の集い』各号、「北星寮再建整備趣意書」（北海道ウタリ協会、1961年）ほか同協会所蔵うせない荘関係資料による。）

⒄　富菜さんが小学生時代（大正末～昭和初年）の杵臼尋常小学校の生徒数は約70～120人で、このころは次第に増加している。

参考資料１　関係年表

凡例
- 主に当時の新聞等から、アイヌ協会の活動に関連する事項を抜き出したものである。調査し得た文献の範囲が限定されているため、年表の掲載事項も個々の資料の視野に規定されている面がある（例えば『アイヌ新聞』は十勝地方および代表者高橋真の交友関係の記事が多い等の傾向がある）ことを断わっておく。
- 支部の動向は浦河支部を中心とし、他については結成式の日程等が資料上明記されているものに限定した。このため、例えば『北の光』創刊号は22名の支部長の氏名を掲載し、『アイヌ新聞』の短信欄などには各地の支部の様子を伝える記事も散見できるが、この年表には若干の支部の動向を掲載したにとどまる。
- 年月日、開催された会議の名称等は原則として出典資料の表現に倣った。

年月日	ことがら	備考	出典
1945.12	このころまでにアイヌ協会結成準備始まる		
1946.1	札幌市北海道庁にて北海道アイヌ協会「結成準備会」開催。	「伊達町議向井山雄、白老村森竹竹市、日高門別村議鹿戸才斗その他道内アイヌ人有志約二十名が参集」。	『北海道新聞』1月26日付。
1946.2.24	静内町にて社団法人北海道アイヌ協会創立大会開催。		
1946.3.1	『アイヌ新聞』（札幌市・アイヌ問題研究所発行）創刊号発行。	同年６月からはアイヌ新聞社発行となる	
1946.3.13	社団法人北海道アイヌ協会知事認可。		
1946.3.21	社団法人北海道アイヌ協会法人登記。		
1946.4.10	第22回衆議院議員選挙。北海道１区に大川原徳右衛門（鵡川）、辺泥和郎（同）、川村三郎（在小樽・樺太出身）立候補するが全員落選。	得票数：大川原5426、辺泥5299、川村1325。	『北海道選挙大観　戦後総集版』
1946.5.31	アイヌ協会小川佐助、文字常太郎ら上京、内務省に対し新冠御料牧場開放とアイヌの入地を陳情。		『アイヌ新聞』1号（通巻６号）
1946.6	北海道アイヌ協会幹部、ＧＨＱスイング司令官に面談。		
1946.6.5	アイヌ協会芽室支部結成式。		『アイヌ新聞』１号（通巻６号）
1946.6.25	アイヌ協会帯広支部結成式。		『アイヌ新聞』７号
1946.7.9	アイヌ新聞編輯長高橋真、ＧＨＱスイング少将と面談。		『アイヌ新聞』８号
1946.7.22	アイヌ協会芽室支部及び帯広支部の役員が札幌へ、道庁厚生課に「支部の法人化」「漁業権」等につき陳情。		『アイヌ新聞』８号
1946.7.23	文字常太郎、ＧＨＱのスイング司令官と面談。		『アイヌ新聞』８号
1946.8.19	アイヌ協会、午前中理事会、午後評議員会開催。	道会議員室にて。1946年度予算、総会費用弁償、資金造成等を協議。『アイヌ新聞』では午後から「定期代議員会」と報じる。	『北海道社会事業』147号、『アイヌ新聞』９号
1946.8.20	札幌市聖公会にてジョン・バチェラー追悼会開催。	向井山雄神父として挨拶、小川佐助アイヌ協会理事として「生前の翁に対する感謝の追悼文」朗読。	『北海道新聞』８月21日付
1946.8	この月、浦河町大衆館においてアイヌ協会浦河支部創立準備会開催。		『40年のあゆみ』
1946.9.23	帯広市にてアイヌ新聞社主催による「十勝アイヌ雄弁大会」「十勝アイヌ協議会」開催。		『アイヌ新聞』号外

年月日	ことがら	備考	出典
1946.10.25	帯広市にて「十勝アイヌ協会」創立総会。	幕別、池田、芽室等のアイヌが参集。	『アイヌ新聞』10号
1946.10	この月、浦河町立西舎尋常高等小学校においてアイヌ協会浦河支部創立の大会開催。		『40年のあゆみ』
1946.12.9	アイヌ新聞編輯長高橋真、マッカーサー元帥及びスイング少将に宛て「感謝状」を送る。		『アイヌ新聞』11号
1947.1	月末からアイヌ協会理事小川佐助、文字常太郎、淵瀬惣太郎の３名上京、宮内省、農林省、厚生省に陳情。高松宮に面会。		『北海道新聞』２月19日付、『室蘭民報』２月11日付
1947.1.30	アイヌ新聞社高橋真、ＧＨＱスイング少将と面談。		『アイヌ新聞』11号
1947.3	第92回帝国議会衆議院に、北海道アイヌ協会（代表者小川佐助）により「アイヌの保護事業に関する請願」「北海道旧土人保護法中改正に関する請願」「新冠御料牧場並びに日高種馬牧場開放の請願」「アイヌ厚生資金充当のため競馬開催等に関する請願」提出。	紹介議員坂東幸太郎ほか。	『アイヌ史　資料編３』
1947.4.5	北海道庁長官選挙に佐茂菊蔵（豊浦）立候補するが落選。	得票数11284	『北海道選挙大観　戦後総集版』
1947.4.16	アイヌ問題研究所長高橋真、宮内省に対し北海道への行幸を依頼。		『朝日新聞』４月18日付
1947.4.25	第23回衆議院議員総選挙、北海道４区から佐茂菊蔵（豊浦）立候補するが落選。	得票数6297	『北海道選挙大観　戦後総集版』
1947.4.30	北海道議会議員選挙、日高支庁選挙区から小川佐助（静内：浦河出身）立候補するが落選。	得票数3412、最下位当選者（定数２）との差2354票。	『北海道選挙大観　戦後総集版』
1947.7(頃)	アイヌ協会、新冠御料牧場開放後の優先入地を求める運動を展開。日高支庁を通じ道庁に「嘆願書」を提出。		『日高新聞』７月４日付、同25日付。
1947.11.2	荻伏村（現浦河町西部）にアイヌ協会荻伏支部による共同作業所姉茶会館落成、この日落成式。		『日高新聞』11月７日付
1947.11.8	小川佐助、辺泥和郎、佐茂菊蔵が上京、政府、ＧＨＱに対し「北海道旧土人保護法」による給与地への農地改革適用除外の陳情活動。	12月15日まで滞在。	ペテ和郎「給与地問題につき上京運動第二回目行動日記抄」『アイヌ史資料編３』
1948.2.10	農林省農政局長から北海道知事に宛て、農地改革においてアイヌの給与地を適用除外とすることは不可能である旨通達。		『アイヌ史　資料編３』
1948.10.27	北海道による開道80周年記念事業における開発功労者表彰において、向井山雄が社会事業功労者として表彰を受ける。	同時に吉田巌らも表彰を受けている	『開道八十年記念行事録』
1948.12.10	北海道アイヌ協会機関誌『北の光』創刊号発行。		『北の光』

参考資料２　新聞記事

ここには、①協会創設時の幹部の中で現在残っている著述が比較的少ない森久吉の新聞投稿、②浦河支部のようすの一端を伝える記事、③浦河の西隣にあたる荻伏の活動のようすを伝える記事の３点を紹介した。
記事の翻刻にあたっては、漢字の旧字体は原則として当用ないし常用のものに改めた。また適宜句読点を補った。
判読できなかった文字は■で表した。

①　［主張］「伊川道議に借問す」『室蘭民報』1946年４月８日付２面

△私は一万五千のアイヌ同族を代表してあまりにもわれ〳〵同族に対する認識を欠き、しかも道政に参与する一道会議員の口より出た言に対し責任を問ふものである。それは去月二十九日今次総選挙に出馬する某候補（特に名を秘す）の政見発表演説会が登別温泉の大浴場にて開催されたが、都合により候補者は出席出来ず伊川道議が候補者代理として応援演説を行った。その演説中に要約すると次のやうな言があった。

△　“上代の時代に神武天皇が大和の国にて即位の儀礼を挙げさせられたのだが、これは先住民族を追払って奪ひ取ったもので、その先住民族とはアイヌ族のことであり、彼等は当時の無智、劣等であり、現代においても何等その時と異るところなく、時の経過とともに衰退の一途をたどり亡びつゝあり、現在北海道には三千人位しかをらず』といひまた『この席にはアイヌは一人もをらぬことゝ思ふが』とまで附加へて広言した

△恰度その席に幸か不幸かアイヌ族の一人である私が居合せ、自分としては早速反駁せんとしたのであるが、他の聴衆の迷惑を考へ、演説の終了するまで沈黙を守ってゐたのである。彼の言の同じ日本人にあるわれ〳〵を無智、劣等とは甚だしき暴言といふべく、既に同族の中より相当な実業家、著名な学者さへ出てをり、この度の選挙には代議士として立候補してゐるものもあるのである。

△　しかも三千人といふす氏はどこから出てきたものであるか、少くとも道政に参与するものが調査も出来てない数字を発表するといふことは恥づべきことである、現在北海道にゐるわれ〳〵同族は一万五千人程度であり、彼の数字とは全然ちがふので、また衰退の事実は全くない。何も知らない道会議員に果して、道政に参与させてよいものか、かかる認識不足のものが政治的才能を有するや否や真剣に考へねばならぬ問題であるとともに、われ〳〵に対する考へは現在民主々義といふ言葉がいはれてをる秋、依然として封建的、排他的な典型をみたやうな気がした。私は同族を代表してわれ〳〵に対する認識を新にしてもらひたいと希ふものである。

（登別温泉・森）

②「日高コタン紀行」『アイヌ新聞』第９号（1946年９月１日）

アイヌ協会の御料牧場開放運動は下からの盛上る声であらうか――を調査の為に札幌中央放送局小熊健吉氏は二十二日から二十四日迄新冠御料日高種馬牧場を視察した。記者も同行したが、文字常太郎、小川佐助両氏が案内役を引受けるといふ熱心さで〔中略〕二十四日は日高種馬牧場を視察したがこゝにも広々とした遊閑地があり、雑草にまじって紅、黄、緑と名もなき花は咲いてコーロギの声のみ淋しく響いてゐ

た。夜西舎コタンで、小川長吉、鱗川由蔵氏等代表が司会で三十余名のウタリの座談会が開かれ、牧場が開放された暁は前に追放され四散した六十余戸のアイヌはみんな戻って土に行き土に死ぬ決意だと語ってゐた。文字氏も小川氏も上京して努力した事を話して一同の奮起を促せば、小熊氏も電波にみんなの真剣さを伝へて全国に訴へると激励すれば、富菜良一同■君、山崎愛子さん等青年代表の顔も明るく希望に燃へてゐた。二十五日帰路の道すがら海産干場問題をも聞いた。日高ウタリの上に幸の訪れる日よ早かれと祈りつゝ擱筆する。（高橋特派員）

③「ウタリーの奮起／共同作業上で更生／姉茶会館完成」『日高新聞』1947年11月７日付２面

亡び行く民族、同化され行く民族、知的水準の低い劣等民族として従来軽蔑されて来たアイヌ民族も、今や民主日本の再建途上に雄々しくも起ちあがり本来の面目を一新しようとして居る。昨年三月社団法人北海道アイヌ協会が静内町に発会式をあげたのわ〔ママ〕世人の記憶に新しい処であるが、同協会荻伏支部では支部長浦川太郎吉氏が音頭をとり、同村三部落のウタリーが一致団結して本春来から共同作業所の設置を計画着々準備を進めて居たが、ウタリーの更生のためならばと率先敷地を寄附する者も現れ、地元竹内村長や古森町会議長の厚意ある取計らいで材料も都合がつき、或るときは木材搬出のため山に野宿し或るときは部落ウタリ総出で芋をかぢり乍ら勤労奉仕をしたかひあって、十一月二日待望の共同作業所姉茶会館の落成式を挙行した。この日同部落のウタリー百五十余名出席、朝野の名士も招待され式に入った。式場にはアイヌ人手製の美しい莚が敷かれ祭壇イナホが飾られて居る。四人のアイヌガアツシを着て正座し古式床しき修拔の祈をあげれば、今こそ報いられた吾が労苦と場内のウタリーは眼がしらをうるませる。浦川支部長の経過報告の後、各来賓の祝辞あり記念撮影を終って祝宴を張り、夜は同族の演芸会もあり民族の祭典はとゞこほりなく終った。